

原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

瀬田玉川神社禰宜



第十二回 『ヨーロッパ人の見た幕末使節団』(後編)

「自国にとって本当に役立つかもしれないことを学んだりすることにかけては、洗練された印象を与える比類ない人びとである」

前回、文久遣欧使節団の派遣には、幕府に対するオールコックの強い勧めがあったと書きましたが、オールコックは、この時ロンドンで開かれた万国博覧会に自らが収集した六百点以上の日本の武器、書画、陶器、漆器、銅器、金工細工類、衣料品などを展示したブースを設け、ヨーロッパの人々に日本を紹介しています。その様子について、あるイギリスのメディアは次のように伝えています。

「日本のコレクションは大規模で、とり

わけ興味深い。それが、ほとんど知られていない国から来たものだからである。

日本人は工芸の分野でたいそう優れているが、その工芸品は非常にバラエティーに富んでいる。その多くはヨーロッパの最上の作品にひけをとらないばかりではなく、多くの点で群を抜いている。マンチェスターとバーミンガム、ロンドンとパリの職人は、日本のコレクションの展示品は自分たちの工房ではとても作れないと思うだろうし、あるいは、作れると

しても大変高いものになってしまい、実際には売れないと思うであろう」

とても評価が高かったことがわかりますね。そして、この万博を契機に「日本趣味(ジャポニズム)」と呼ばれる日本工芸美術愛好の熱が英仏を中心にヨーロッパに広まりました。

もつとも、使節団の団員から見れば、日本ブースの陳列品の中には、蓑笠や草鞋など余計な生活雑貨も混じっていたようですが……。

一方、使節団は、ヨーロッパの建国の法、政体、風俗、城郭、砲台、軍制、産業、貿易、軍事産業、貨幣鑄造法、産業用機械の制作方法など、一つでも多くの知識を得ようと熱心に視察しました。

その様子をヨーロッパの多くのメディアが取り上げています。

「彼らは何事かを不思議がったりとくに驚いたりもせず、知的であり、知識も豊富なように思われる。彼らは知識欲が旺盛であり、自国でヨーロッパに関する報告を多く読んできたのである。そして、すでに読んだ本にある挿絵を観察するような、例えばそんな興味をもって、ここでの実際の暮らしを学んでいる」

「ヤンキーの穿鑿好き、あるいはフランス人の活発さなどと言うが、その点で日

本人は、その二国をあつさりとは負かしてしまった。日本人の素早く動く、生き生きとした、休みのない目は、訪れた場所の隅々にまで及び、どんな小さな特徴でも探り出した。……その熱心さ、精力、知識を獲得する際の障害に対する完全な無関心ぶりは驚くべきものである。いかなる疲労も耐えられないものではなく、いかなる不便にも怯まない」

彼らは初めてヨーロッパに来たわけですが、実は「鎖国体制」の中でも国交のあったオランダを通じて、かなりヨーロッパ事情に精通していました。それを実際に見てやろうと西洋のあらゆるものに対して、絶えず目を爛々とさせて、好奇心たっぷりの姿勢で西洋事情の調査に臨んでいたのです。

プロイセンのジャーナリスト、ユリウス・ローデンブルグはその姿勢がよく分かるこんな記事を書いています。

「何かを本気で観察したり、また自国にとつて本当に役立つかもしれないことを学んだりすることにかけては、洗練された印象を与える比類ない人びとである」。また日本人は現実を直視していて、国を守るためにクリアしなければいけない課題に立ち向かっている。そして、「日本は、ヨーロッパが突破口を破ったと感じており、また、そのヨーロッパが、将来的にまったく別なもの、すなわち平和貿易

易条約というものを腹に含んでいるかもしれないことに恐れを抱いている。日本は、小銃や装甲艦に弓矢では抵抗できないことが分かっており、ヨーロッパの軍事技術から役立つ知識を得ようと努力している。フランス使節が日本政府に対して、いろいろな贈り物と共に大砲を贈ったときに、彼が受けた最初の質問はこうであった『大砲の砲身に溝は彫られていますか』と。

このようにヨーロッパ各国で大きな称賛を浴びた使節団ですが、彼らが日本に持ち帰った成果は何だったのでしょうか。

これについては、宮永孝著『幕末遣欧使節団』に詳しく記載されています。使節団の主目的であった開市開港延期の談判については、後にイギリス側に条件付きで承認させることができ、ロンドン議定書を調印するに至ります。イギリスと約束した影響は大きく、諸外国も対日貿易を維持するための協定に調印します。

西洋事情を詳しく調査するという目的については、大きな成果がありました。当時の日本は攘夷の嵐が吹き荒れているさなかであり、実際には幕府の施政ほとんど活かすことができませんでした。

もともと西洋事情調査の発案は幕府首脳から生まれたものではなく、正使竹内

下野守保徳の発案でした。竹内は老中安藤信正に「国家のためにも精々心を尽して西洋事情を子細に調査したい」という主旨の上申をしました。帰国後、竹内自身は外遊によって得た新知識を活かす機会がないままキャリアを終えましたが、使節団の成果は全く水泡に帰したというわけではありません。例えば、使節団の組頭であった柴田貞太郎は、その後の第四回使節団の中心者となりました。第四回使節団は横須賀製鉄所建設準備と軍制調査を行い、その成果は海軍建設や近代化に活用されることとなります。

また、文久使節団の随員の中からは、福沢諭吉、福地源一郎(桜痴)、松木弘安(寺島宗則)など明治時代に指導的役割を果たす人物を輩出しました。特に福澤は見聞したことを『西航手帳』『西航記』としてまとめ、さらに啓蒙書の形で『西洋事情』を出版。『西洋事情』は『西国立志編』『興地誌略』とともに開化期のベストセラーとして広く読まれ、大きな影響を与えました。松木は医師でしたが、後に新政府の外交官となり、外相や駐米特命全権公使などを歴任します。

福澤や松木など使節団の数名の団員は、帰国後、政治の世界に身を投じ、西欧で体得し得たあらゆる限りの知識を以て藩論を指導、維新変革の政治的礎となっていたのです。